

【翻訳】

## 一人称 —— 「私」は何を意味するか ——

アンスコム  
大辻正晴(訳)

## The First Person

G. E. M. ANSCOMBE  
Masaharu OTSUJI (trans.)

要約

A Japanese translation of G. E. M. Anscombe, "The First Person", an important article on the topic of the self. Anscombe argues that if "I" is a name it requires a conception, i.e. a way of being given, of the object referred to, through which "I" refers to the *I*, but that we can find no such conception. Then she points out that "I" can make no reference failure although such regular referring expressions as names and even demonstratives can ones, and concludes that "I" is no referring expression, there being no such thing as the self. Anscombe goes on to say that "I am E.A." is then not an identity proposition, but that it implies the verificational relation between her I-thoughts, such as "I am standing", etc., and her body. Finally she asserts that I-thoughts are unmediated, "subjectless" conceptions about that body which one is.

キーワード：デカルト、アウグステイヌス、一人称、「私」、間接再帰、自己意識、自己、デカルト的自我、私は考える、固有名、指示、指示対象、フレーゲ、意義、直示語、身体、私思想、観察によらない把握

## デカルトとアウグステイヌスに共通の前提

デカルトと聖アウグステイヌスでは、「私は考える、ゆえに私は在る」という論証——アウグステイヌスでは「私が欺かれるなら、私は在る」<sup>(1)</sup>だが——が共通するだけでなく、そこから系として導かれる論証、すなわち心が（アウグステイヌスの場合）、ないしデカルトの言い方であればこの私がどんな種類の物体でもないのを証明すると称する論証までもが共通している。「私に身体がないと想定することはできようが」とデカルトは書き、「しかし私が在らぬとは想定できない」と続けて、そこから「この私」は身体でない<sup>(2)</sup>と結論づけた。「また」アウグステイヌスは言う——「心はそれ自身が考えるのを知り」そして「心はそれ自身の実体を知る」、それゆえ「自らがそれであると心が確信するのは唯一その実体のみであり、唯一それのみ、自らがそれであると心は確信するのである」<sup>(3)</sup>。「確かに」ここでアウグステイヌスは明らかに、デカルトのように一人称で論証を提示しているわけではない。「だが」デカルトの論証の一人称という性格が意味するの

は、各人がその論証を一人称の形で自分用に行わねばならぬということであって、聖アウグスティヌスのさまざまな命題にたいしても同じように、そうした命題を一人称の形で転用することで同意がされることだろう、およそ同意するならの話だが。二人の著者にはこんな前提がある——「私」や「心」と言うさいには何ものかが名指されているのであり、しかもその何ものかとは、そのものが存在すると知ること、それはそのもの自身がありとあらゆる様式で考えるものだということなのだ、そうと知ることが、存在すると知られるものの何たるか「物体でないという本質」を決定するようなものだ、という前提である。

### 「私」を前提する再帰——間接再帰

ソール・クリプキは自らの二元論のためにデカルトの論証を復権させようとした。<sup>2</sup>しかしクリプキは当の論証の本質である一人称という性格を無視し、その結果、この論証をデカルトが自分の身体と同一でないことの論証にしてしまっている。他に何を言っているかというと、デカルトの論証が疑うという方法を用いる結果に依存しているのは明らかだと思える。<sup>3</sup>だがその方法によってデカルトは、デカルトという人間が存在することを疑わねばならなかった。少なくとも当時の世間で通っていたあの人士、しかじかの家系に生まれて「ルネ」という洗礼名を授かった、あのフランス人が存在することを、のみならず「一頭の動物としての」その人間が存在することさえも——人間が動物の一種ではないというのでないかぎり。すると、かりにかれ自身がおのれ自身の身体と同一でないことがかれの出発点から帰結するとすれば、同様にしてかれ自身がデカルトという人間と同一でないことも帰結することになる。「私はデカルトではない」という結論をかれが引き出すの

は「私は身体ではない」を引き出すのと全く同じように健全だったのだ。「私」を「デカルト」で置き換えて当の論証を三人称に仕立てるのはこの点を見逃すことになってしまふ。デカルト本人はその「私はデカルトでない」という結論を受け入れたらう。「私はデカルトです」とかれが言うのが正しかったらどう意味あい、あのありふれた実際の日常的な意味あい、こうした論証のさいにはかれに何の関係もなかった。「私」が名指すもの——そのものは、かれの書物のなかではデカルトではなかったのである。

「かれ自身がデカルトと同一でないことは、もう一方「かれ自身が身体でないこと」と同じく妥当な結論だった」と言って、これをすでに背理法たるものと見なしていないのは、奇妙に思えるかもしれない。なぜって、この言い回しは「デカルトがデカルトと同一でないこと」と同値ではないか？

否。同値ではないのだ。というのも、問題になっているのは通常の再帰代名詞ではなく特殊な再帰であって、これは「私」という語を用いて説明すべきものだから。それは文法学者が〈間接再帰〉と呼ぶ再帰であり、そのための特別な形のある言語（例えばギリシア語）も存在するのである。<sup>4</sup>

### 「私」の説明が間接再帰を前提

「ジョン・スミスがジェイムズ・ロビンソンの話をしたとき、かれは自分の兄の話をしていたのだが、そうとは知らなかった。」これは生じうる状況だ。同様に「ジョン・スミスがジョン・ホレイシヨウ・オーベロン・スミス（あるいは遺言中でそう呼ばれていたのかも）の話をしたとき、かれは自分自身の話をしていたのだが、そうとは知らなかった」という状況も生じうる。そうであるなら、自分自身への話

をしている」とか自分自身へを指示している」とことと、話題とする対象が自分自身であることを知らぬことのあいだに矛盾はないことになる。

でも我々は「それは各人が自分自身の話をするとき使う語だ」が、「私」が何を名指すかを、あるいは「私」の〈指示表現〉たるゆえんを明らかにしていると考えたくなる。だが「かれは自分自身の話をする」が「話題が自分自身だ」と知らないことと矛盾せず、どちらの用例でも再帰代名詞「自分自身」が通常の仕方では使われているのなら、上の「私」の説明は説明の役を果たせないのである。

「私」とは、各人がそれと知りつつ意図して自分自身の話をするとき使う語だ」と言うことでこの問題は説明できると思ふかもしれないが、これもうまくゆかない。なぜって、スミスはそれと知りつつ意図してスミスの話をしたのではないか？ 話題にしようとかれが意図した人物、それはスミスではなかったか？ だとすると話題にしようとかれが意図した人物、それは自分自身に他ならなかったのでは？

こう言われるかもしれない——「適切な意味でそうなのではない。周知のとおり、かれが話題にしよう」と意図した対象を表示する語句なら何でも、置き換えた上でなお、かれの意図を述べる言明を真のままにしておけるというわけではない。」しかし、対象を特定する仕方を当の再帰代名詞「自分自身」じたいが十分なだけ表示しているのではないかぎり、これは答えにならないのだ。しかもそうするのは通常の再帰代名詞には不可能なことなのである。「例えば」次の文を考察せよ——

自分が「スミス」と呼ぶ対象がかれ自身と同一だとスミスは分かっている（分かっている）。

ここでの再帰代名詞「かれ自身」が通常のものなら、それは文を作っ

たり聞いたりする我々に、かれが「スミス」と呼ぶ対象と同一であるのをスミスが分かっていたりいなかったりする対象を特定してくれる。すなわち当の文の主語「スミス」が指定する対象を。しかしそれは、スミス自身がどんな同一性を分かっているのか（いないのか）教えてはくれないのだ。なぜってフレーゲが主張したように、指示「対象、意味」から意義へ逆戻りする道はないのであって、どの対象にも特定する仕方は数多あり、この場合には、文を構成するやり方が変わっているせいで、スミスの心がその対象をつかまえるはずのその把握の仕方を我々は何も特定しないまま、一つの対象を（くだんの文の主語を介して）特定しおおせている「だけな」のだから。こんなことを言うのも、我々は「スミスがスミスと同一だとスミスは分かっている」とは言いたくないからである。

「かれ自身と同一であるのをかれは分かっている」のなかの再帰「代名詞」をしぶとく通常の再帰と見なしつづけるなら、そこで意図されている同一性が特定できないのを許すはめになるだけである。「むろん」じっさいは何の困難もない。スミスが何を分かっていると我々が言いたいのかは知っている。それは「直接話法で」「私がスミスだ」ということである。しかし、これが問題の再帰を我々が理解するやり方であるなら、それは通常の再帰ではない。それは一人称によってしか説明できない特別な再帰「間接再帰」なのである。

### 「私」の意義が問題に

これが正しければ、「私」という語を「指示表現として」（各人が自分自身の話をするさいに使う語）だと説明するのはほとんど説明になっていない！——少なくとも、当の再帰「自分自身」を今度は「私」でもって説明せねばならないかぎり、上の説明は少しも説明になって

おらず、他方でそれが通常の再帰だとするなら我々は振り出しに戻ってしまふのだ。「そこで」「私」というこの名前に準ずる語に意義を特定してやる必要があると思える。フレーゲの論点を繰り返せば、ある人間が「私」と言うときどの対象を話題にしていることになる（それを知ろうと知るまいと）のか教えてもらうだけでは、この意義を手知っていることにならないのである。むしろ、この「それを知ろうと知るまいと」という句はひどく馬鹿げて見える。「私」という語を使う以上、それを現に知っているのが保証付きなのは確かだ！しかし、「そのとき」かれが何を知っているのか問う権利が我々にはある。「私」という語が、その対象にかれが到達する仕方を、すなわちフレーゲが「対象の」<sup>アールト・デス・ゲゲンペンサイツ</sup>与えられる仕方」と呼んだものを表現しているなら、その仕方がどんなものであるのか・その仕方で誰もが到達する唯一の対象がそいつ自身と同一だということがいかに生ずるのか、それを知りたいのである。

### 「私」はそもそも固有名なのか

このように言うことはすべて、「私」を一種の固有名と見なししているわけである。だがそれこそ我々をこのような窮地に追いやるのだ。確かに「私」という語は構文論上は名前と似た働きをする。しかしながら従来「私」は固有名でないと言われてきた。さて、そう言うのはつまらぬ意味で十分に明白なことだという印象を与えるかもしれない。何と言っても我々は「私」を固有名詞とは呼ばず人称代名詞と呼んでいるのだ。いずれにせよそれは普通の固有名ではない。固有名の特徴であるような使い方と同じ使い方を「私」には大してできないだろう。というのも、もし「私」がそうした「固有名のような」ものなら、この名前は誰にでも付いているものとなり、もっと悪いことに、自分自

身がその人物である当の人物を各人が指示するただけに使うものとなるからだ。だからその名前は人々を互いに紹介するさいに役立たないし、誰かに呼びかけるさいにも、その誰かを呼び出すさいにも役立たない。そしてこの語は署名として使われるかもしれない（聞いた話だが、高齢でヨボヨボの牧師が誰かの結婚証明書に「教区牧師 わし」と署名したように）けれども、ひとは署名した者が誰かを同定するための別の手がかりに頼りきりになるだろう。この「私」が万人の有する唯一の名前だったら、ウェイルズの村の銀行よりも手に負えない事態になっていたろう。かかる不便さを免れているのは言うまでもなく、同じく人々に付いている他のもっといろいろな固有名があるからだ。だから、「私」は固有名でないと言うことは、万人に一つの語が付いていて万人が自分自身の話をするただけにその語を使うのならば、その語が固有名と呼ばれることはないかもしれない、そんなつまらぬことに帰着するように見える。——だがそれさえ本当のことか？ そもそもシク教徒は全員が「シング」と呼ばれているように見える<sup>8</sup>。だから本当の違いは、各人が「私」という名前を自分自身の話をするただけに使う、その一点にあるのだ。それが「私」を固有名と叫ぶない根拠なのか？ 現代の論理学者の目からすれば固有名であるのは確かだ。かれらの目は曇っているのか？ それとも本当に「私」は論理的には固有名であるのか？

### 自分自身を指示する固有名「イ」

「私」を固有名と呼ぶない理由は誰もが自分自身を指示するためだけにその語を使うという点に尽きる、というのは本当に正しいのか？——そう問うてみよう。まさしくそのような名前の明確な事例を構成してみよう。各人が二つの名前で名付けられている社会を想像せよ。



一方はかれらの背に、また胸部のいちばん上にも書かれていて、こちらの名前（その持ち主には見えない）はさきまである——これを「ロ」から「ス」までとしよう。もう一方すなわち「イ」は人々の手首の内がわに印銘されていて、こちらは誰も同じものである。人々の行為を報告するさい各人は他人の胸や背中の中の名前を、こうした名前が見える場合、あるいはその人を見慣れている場合には使う。くわえて自分の胸や背中の中の名前が発話されたときには、自分の名前が発話された場合に我々が反応しそうなたぐいのやり方で、またそのたぐいの状況で反応することも、各人は学ぶのである。自分自身の行為の報告、それを各人は観察から即座に行うのだが、これは手首の名前を使ってなされる。そのような報告がなされるのは、観察に基づくだけでなく、推論と証言にも、あるいは他の情報にも基づく。例えば口は、「ロ」を主語に使っている他人の言明から、「イ」を主語とする文が表現する結論を引き出すわけである。

「自分自身の行為の報告」とはどういう意味かと問われるかもしれない。これが意味するのは例えば、口の行為に口から発せられる報告だ、ということにしよう。すなわち口の口から発する、イがしかじかのことをしたと語る報告は、口がそれをしたと確認すること、一応は検証され、また口がそうしなかったのを見出すことで決定的に反証されることになる。

そんなわけでどの人物にとっても一人づつ、独特の仕方に限られ、また独特の仕方の特権的な見え方のする人物「つまり自分自身」が存在していることになる。すなわち、かれには鏡のなかを除けばその人物の全体が見えることはなく、その人物の目に現に見えているもののがかなり特別な見え方が手に入るのみである。こうした見え方には特別に良いものもあれば、特別に悪いものもある。もちろん、口という人間がときに間違ふこともあってよい。こんな場合だ——別人「例えば

ハ」の手首に記された名前「イ」を見ているのに、かれ自身の名前「ロ」がある特別の仕方で見えない、それと同じ仕方でもう一方の名前「ハ」が見えないわけでは結局はない者「つまりハ」の手首だということ、そのことが分かっていない場合である。

（この例を次のように変えたと想像力の助けになる者もいるかもしれない。——かなり人間らしからぬこうした人々のかわりに、カメラを具え、私の物語のなかの人々が自分の名前前で印付けされていたのと同じように記号で印付けされて、カメラに繋がるスクリーンに現れるものを報告へと翻訳するようプログラムされた機械を想定するのである。）

### 「イ」と「私」との相違——自己意識

私の物語では、ある記号「イ」を名前として詳しく規定していて、その名前はどの者にも同じであるが、各人が自分自身の話をする目的だけに使われるわけである。この名前は「私」と比較するとどうなのか？——注目すべき第一の点は、先の描写のなかに、私が描写した仕方で名前「イ」を使う人々のがわの自己意識が含まれないことである。この人々にはもしかすると自己意識がないかもしれないのだ。各人は自分が（事実として）同じである当の対象についてたくさん知っているのに、また他の全員に付いているのと同じ名前、しかも自分が（事実として）同じである当の対象について報告するさい使う名前が付いているのに。

このこと——かれらに自己意識がないこと——は、まさしく右の理由により、本当でないと思えるかもしれない。口は口の活動の、すなわち自分自身の活動の一部を意識している、すなわち観察している。かれは「イ」という名前を、他のみんなが使うように、自分自身を指

示するのに使う。だからかれは自分自身を意識している。だから、かれには自己意識がある。

しかし自己意識の話をするとき我々はそのことを言っているのではない。「イ」と対比される「私」を使うことで明白となる何かのことを言っているのだ。

### 自己意識は「自己」についての意識」か

それゆえ我々は自己意識セルフ・コンシャスネスを理解するようにならねばならぬ。予想どおりかもしれないが、この用語は一七世紀になってようやく現れ、その由来は哲学である。日常言語に入り込むことでその語は変化し、一九世紀までに哲学的概念とは相当に無関係な意味を獲得する。すなわちこの語は、他人の観察の対象にされていると感じて困惑することによるぎこちなさの意味するようになる。こうした変化が哲学用語に生ずるのはよくある。——とはいえこの用語は心理学と精神医学にも入り込み、ここではその意味は哲学的な意味とさほどかけ離れてはいない。

誰かが思いつくかもしれない自己意識の最初の説明、そして「自己意識」という表現の形が示唆するものはこうだ——それは自己セルフについての意識である。「その場合」自己とは一部のものが有する・ないしそれに他ならぬ、そういった何かということになる。『第一に』ものが自己を有する場合、自己とは当のものに結びついた何かであり、それを有する当のものがそのおかげで「私」と言ったり意味したりできる、そうした何かである。自己とはかれが「私」と呼ぶものである。「私」を意味できることはこうして、「私」と呼ぶのに相応しい種類のものを有していることだと説明される。「私」という語の空想上の使用の方、「例えば」もしや誰かがロウ人形の警官に「私はただのロウ人

形です」という札を貼り付けたりする場合、あるいは『不思議の国のアリス』に出てくる瓶の「私を飲んで」と記されたラベルでの使い方は、問題の対象が自己を有している（あるいは自己に他ならぬ）という見せかけである。自己はデカルト自身が用いた観念ではないが、デカルト流の自我理論エゴ理論に付け加えられてよいし、くだんの理論の展開としてはデカルトが〈この私〉を自らの魂に他ならぬとしたのより自然である。『第二に』ものが自己を有しているよりむしろ自己に他ならぬ場合は、自己とは何か、例えば一人の人間、しかも特別の様相にある人間であって、その様相とはかれが〈人格〉となるや否や帯びるものである。すると「私」とは各人がただ自分自身（これは直接再帰である）にたいしてのみ、しかもちょうど上の様相にある自分自身にたいしてのみ使う名前となるだろう。

こうした見解の下では、「自己意識」のなかの「自己」をひとが説明するのは、かの伴ってある自己がどんな種類の対象か説明する「ものが自己を有する場合」、あるいは上の様相がどんなものか説明する「ものが自己に他ならぬ場合」、そのいずれかによることになる。そうした説明があれば「自己という」対象の、その話をするさい用いる名前「私」に結びついた例の特別な〈与えられる仕方〉が、手に入るかもしれないのだ。

### 自己意識と間接再帰

さて、こうしたこと「自己意識とは自己なるものについての意識だ」という見解のすべては完全なノンセンスである。それは再帰代名詞を誤解したことから膨れ上がっているのだ。それがノンセンスであることは次の事実からも明らかである——正しい自己が手に入ることを、すなわち、ある人間が「私」と呼ぶ自己がつねに当人と結びついてい

ること・ないしつねに当の人間自身に他ならぬことを、何が保証してくれるのか、それが問題になってしまいうという事実だ。そうではなく、「人間と結びついた自己」は当の人間がいつであれ「私」でもって意味する自己を（それがどんな自己だろうと）まさしく意味するのだと言ったところで、その自己とかれとに何かそれ以外の関係があることは運命の情け「偶然」によるものでしかなかるう。

けれども「自己意識」「じたい」はそんなノンセンスでは全然ない。まだ説明されてないとはいえ、それは現実のものであり、「私」使いにはあるが、「イ」使いには欠けているだろう——「イ」使いが「イ」を使う仕方は、かれらが自分自身「これは直接再帰」を意識するのに十分な道具であつても——ものである。

「自己意識」という表現はまずまず（しかしか）のことが自分自身に成立しているという意識だと言明できる。とはいえ次のような議論も許すべきでない——ここには「自分自身」が現れており、それは「かれ自身」という語、スミスに分からなかったこと「私がスミスだ」を我々はこの語から申し分なく理解できたわけだが、この語が現れるのとまさに同じようなものだから、「自身」「自己」という語はそれじたい、（論理的に言えば）固有名たる「私」に結びついた求める（与えられる仕方）を内示しているに相違ない、という議論だ。これを斥けねばならぬ理由は、「自分自身」がここでは間接再帰、すなわち間接話法の再帰以外の何ものでもないことである。間接話法を理解するさい我々は関係する直接話法「しかしか」のことが私に成立している」がどんなものか知っている。それですべてなのである。

### 意義としての自己意識、指示対象としての自己

こうした考察には魅力がないことだろう。「私」が何を指している

か、それこそが問題なのだ。この問題を問うのなら、そして「私」は固有名と同じようにその対象を指すものとされているなら、ある種の説明が必要になってくる。ある対象の名前を使うことは、当の対象を把握する仕方「対象の与えられる仕方、名前の意義」と結びついてゐる。そこで我々は捜し求めるよう追い込まれてしまうのだ——都市を把握する仕方が「ロンドン」や「シカゴ」「という名前」に、川を把握する仕方が「テムズ」や「ナイル」に、人間を把握する仕方が「ジョン」や「パット」に關係する、それと同様にして名前と想定される「私」に關係するような、各「私」使いにとつての把握の仕方となるだろう何かを。そうした把握の仕方は「私」が名前であるなら必要であり、しかもその役目を果たすと主張できる把握の仕方は（自己意識）が示唆するものより他に存在しない。これこそ、一部の哲学者が（自己）（あるいは自己意識をつうじて定義された（人格））という概念を精緻に検討し、そうしたものが何でありうるか見るための探究を行ってきた理由である。そして「ロンドン」に同じ指示をもたせて使い続けるなら同じ都市への指示を続けていなくてはならぬ、それとちょうど同じように、「私」に同じ指示をもたせて使い続けるなら我々は同じ自己（あるいは（人格））への指示を各人で続けていなくてはならないわけである。

このためにロックのがわで想像力の離れ技が必要になった——「私」はそれをやった」という思想、つまり行為としての記憶という紛れもない思想を思考した思考実体は、にもかかわらず、行為がなされる最中に「いま私はそれをやっている」という思想を抱くこともできたはずの思考実体とは別の実体かもしれないではないか？　かくてロックは自己ないし（人格）の同一性を、私思想「私はそれを行った」などの思想」の思考をじっさいに行う「そのつどの」思考存在の同一性「では不十分として、そこ」からさえも切り離したのである。

## 「私」はむしろ単称代名詞なのか

再帰代名詞をめぐる考察をもつてしても、「私」が名前と見なされ、また「私」の対象たるものの型を表すのに相関語「自己」や「人格」が必要とされるかぎり、唯一ないし複数ある「自己」をめぐる探究の洪水が堰き止められることがありそうにないのは確かだ。にもかかわらず、この二点はそうした探究にたいする信任状としては問題をこじらせるものである。そして「私」を固有名と解しなくとも自己を「私」が指すあるいは表示するものと考えるのはじつは可能なのだ。「私」を固有名と見なす理由は二つあった。第一に、論理学者から見てそれが一つの固有名である点、第二に、〈自己意識〉を表現している以外は例の「イ」（これは明らかに固有名だった）とちょうど同じように見えた点である。だから我々は「私」を自己の固有名だと説明しようとしたわけだ。さて、〈自己〉の話をすることには何の異論もないであろう多くの人々も、「私」を自己あるいは他の何かの固有名と呼ぶのはまだ落ち着かない感じがするだろう。各人の口から発せられるとき異なる指示を有することが「固有名と呼ぶことへの」反論にならない（「イ」を固有名と呼ぶのに何も反論はない）のははっきりしたと思うので、何か別の理由があるのだ。思うにその理由とは——そのように「固有名だと」理解された場合、同じ自己と結びつけて「私」を繰り返し使用することは、当の自己を再同定することを含まねばならなくなるだろう、という点である。というのも、そうした使用はまず間違いなくつねに、語の対象が現れているところでなされるのだから！ 自己の再同定を話題にすること「そのもの」には何の異論もない——それは自己について書く哲学者たちの主たる関心事の一つ「人格同一性の問題」だ——が、再同定することは「私」の役割の一部ではいささかもないのだ。「他方で」それに対応する再同定が

「イ」の使用には現に含まれていたのであり、それは両者「私」と「イ」の相違にさらに加わるものである。

だからひよっとすると「私」は名前ではなく、むしろ〈単称指示〉の標示である別種の表現かもしれぬ。論理学者が固有名というものを理解する仕方では結局のところ、この特性だけが必要だった。名前ではないのに論理的にも構文論的にも固有名として機能する表現というものが存在する。もしかすると定記述<sup>10</sup>がそのように機能するのかもしれない、また確かに一部の代名詞はそうである。「私」は代名詞と呼ばれるので、まずこちらを考察しよう。残念ながら〈代名詞〉という範疇は何も教えてくれない。なにしろ単称代名詞には変項である（「誰かがそんなこと言ったら、そいつは馬鹿だ」のように）<sup>11</sup>可能性、それゆえ対象を単称的に表示するたぐいの表現では何らない可能性すらあるのだから。「代名詞」という語じたいが示唆すること「名詞の代用」を代名詞が一般に保証しているわけではない。すなわち、文に含まれる代名詞を一般名「普通名詞」であれ固有名であれ名前前で置き換えても当の文の意義は変わらないという示唆だが——「置き換えてよいのは」具体的にどんな名前なのか、その一般的な規則を見出すのは難題だろう。もしかすると「代名詞」という語はまさに人称代名詞にこそ、しかもかくべつ「私」にこそ相応しい名称と思えたかもしれぬ。しかし「私はエリザベス・アンスコムではない」という嘘が有する意義は「エリザベス・アンスコムはエリザベス・アンスコムではない」ではほとんど保たれていない。だから上記の示唆にはほとんど価値がないのである。

## 「私」は直示語なのか

直示語と呼ばれる単称代名詞（「これ」と「あれ」）は、名前で



はないけれど論理的には名前として機能する表現の明らかな例である。それというのも、こうした語を含む真なる命題の内部では、それは明確に同定できて何ごとかが述語づけられている主語項（対象）への指示をもたらずからだ。すると「私」はもしかして一種の直示語かもしれない。

直示語の同類だとすることで、表示される対象を把握する仕方が必要にならずに済む——かつて考えられたであろうとおり——というわけには行かない。なぜって、たとい誰かが「これ」や「あれ」とだけ言うとしても、その者を理解しようとするれば我々は「この何だ？」という問いへの答えを知る必要があるから——そして何ものかを意味しようとしているなら当人はその答えを知っている必要があるからだ。<sup>(3)</sup>

かくて正しく使うなら単称直示語はしるべき論理的主語「項」をじつさい与えてくれる、〈担い手〉ないし〈指示対象〉が欠けないかざりは。だから単称直示語は論理学者が名前に要求することに合致しているわけである。そして「この何だ」という問いへの答えは「この自己だ」であると見なされるかもしれない、複数の自己があること、そしてその自己が「私」と言うこうした人々みな話題にするもののように見えること、そのことが示せるとすれば。かくて、自己をめぐるこうした哲学的探究がある種の口実を手にするものとなろう。

### 直示語が指示しそこなうことがある

「これ」や「あれ」という単称直示語を正しく使っていれば、指示対象が欠けていることはありえないだろう、かつてはそう考えられていた<sup>(4)</sup>。だがそんなことはないで、その点は「この何だ」にたいする答えが要求されることを考慮すれば明らかになるのだ。あるひとが箱を手にとってきて「かわいいそうジョウズが遺したのは、これだけ

だ」と言う。「この何だ」という問いへの答えは「この灰のいくれだ」なのだが、その箱が空っぽである「だから指示対象はない」のを話し手は知らない。「これ」が正しく使われる場合なくてはならないのは、その語が「指示する対象と区別される」捕捉<sup>ラッチオン</sup>している（そう言うことにする）何かであって、それはこの例では箱である。別の例ではそれは視覚的な形象かもしれない。例えば「岩の前に立っているあの形は何か、人間かそれともポストか」と私が尋ねることもあるが、そんな対象はいっさい存在しないかもしれない。しかしある見かけ上の何かがあって、ひよっとするとそれはシミ、あるいは岩石表面の他の紋様かもしれないが、私の「あの」はそれを捕捉<sup>ラッチオン</sup>しているのだ。指示対象と「これ」の捕捉しているものとは、「この耳のなかでブンブンいうのが耐えられない」とか、誰かが一席ぶつたのを聴いて「あれは素晴らしいかった！」とか私が言う場合のように一致することもある。けれども両者は一致する必要はなくて、「その場合の」指示対象とは「これ」や「あれ」が主語であるときに述語が述語づけされている当の対象である。

### 「私」が指示しそこなうことはない

指示をもたらず単称名辞として「私」を何かの同類とするなら、それをもっともらしく思えるであろう代名詞は直示語の他にない。むしろ、こんなふうに言う者がいるかもしれない——「そもそも、『私』が何かの同類だとどうして考えるのか？ 事物はおのおの、他ならぬその事物であって別の事物ではない！ だから『私』は代名詞であって構わない、ただ他ならぬその代名詞であるというだけなのだ。」だが、それでいささかも済みはしない。なぜなら〈代名詞〉がたんに「共通点のない雑多なものを詰め込んだ」ゴミ箱的な範疇にすぎないことに

なるからで、それなら同じように「私」は他ならぬその語なのだ」と言っても構わなかったろう。問題は、「私」の意味を記述することである。そして、かりに「私」の意味に指示という觀念が含まれているなら、ここで〈指示〉とは何であるのか、またいかに達成されるか、それを見ることなのである。我々はいま、通例の固有名にかんして達成される仕方では「私」において「指示が達成されない」と想定しているのだが、とすると、「私」は定記述の省略形でないなら何か別の仕方でその対象をつかむのでなくてはならない——そして、直示語「という仕方」以外にどんな仕方があるのか？

しかし「私」と普通の直示語とのあいだには一つ対照的な点があるのだ。灰が存在しないときも「この灰のくれ」をひとが意味するかもしれない点で、指示しそこなう可能性が「これ」にはあることを見た。しかし「私」には——それが指示をなすのなら、すなわち「私」が意味する様式はそれが指示をなすとされている点であるなら、の話だが——指示しそこなう心配は無用なのである。たんに「私は……」と考えるだけで、指示対象が存在することのみならず現れていることは、現れていることをそれが保証するからこそであり、現れているとはすなわち意識に現れていることである。しかし注意せよ——ここで「意識に現れていること」が意味するのは物理的に、ないし現実に見れていることであつて、たんに「その場がない」当のものについて考えているというだけではない。というのも、考えることが現れていることを保証しないなら、指示対象が存在するか「依然として」疑うことができるから。同じ理由で、「私」が名前であるなら空なる「何も指示しない」名前ではありえない。私の存在とは、「私は……」が表現する思想を考えることに含まれている存在なのだ。これが言うまでもなく「デカルトによる」私<sup>ゴキルト</sup>は考えるの——および後で示すが

「127頁」その系となる「私は身体でないという」論証の——眼目なのである。

「私」が名前だろうと直示語だろうと、この語がある〈把握の仕方〉をつうじて対象に貼り付く、その〈把握の仕方〉は同じように必要である。それなら、考えるという把握の仕方、すなわち「私は……」という「私思想を考えること以外に、指示しそこないが生じないという上の保証を与えるどんな把握の仕方が挙げられうるのか？」「その答えとして」「自己とは何かを記述するのも、まことに結構なことではある。しかし、自分が自己であると知らなければ、「私」でもって自己を意味することは私にはできないことになるのだ。

### 論理学者にとつての「私」

この点をはつきりさせるのに一人の論理学者を想像しよう——この学者にとつては、「私」が有する固有名という構文論上の性格は固有名たることを「私」に保証して余りあるものであり、それゆえ「私」を主語とする命題の真なることは「私」が名指す対象の存在することを十分に保証してくれる。かれはもちろん、間接再帰について私が指摘したことをすべて認める。そうしたことも論理学者を不安に陥れることはできない、〈与えられる仕方〉にかれが何の関心も示さないかぎり。かれにとつて、私の口から出た「私」がエリザベス・アンスコムにたいするいま一つの名前にすぎないことは明らかなのだ。なるほど「私」にはいくつか奇妙な特性があるかもしれぬ。だがそうした特性に論理学者は興味がない。その理由は、「私」が次の「真理条件の」規則に支配される名前であるという点だ——

「私」を主語とする主張をXがなす場合、そうした主張が真であ

るのは、このように主張に使われた述語がXについて真であるとき、かつそのときにかぎるであろう。

これが、クリプキ——およびデカルトを論ずる他の人々——がデカルトの「私」から「デカルト」へ移行してしまふ理由を説明するだろう。

### 「私」と言うものは身体か

さて第一に、この規則からデカルトへの性急すぎる反駁が可能になる。デカルトが誤っていたという結論を即座に出すには、デカルトが「私は身体ではない」と主張したという情報にくわえ、かれが人間だったという知識、すなわちある生物種に属する動物、つまりある種の生命を有して生きる身体だったという知識があればよい。

しかし、厳密に言ってデカルトという人間がその主張をなしたのであることを否定する言葉が、デカルトの口あるいは筆より発せられることだろうし、またそのはずである。「確かに」先の規則は十分に健全ではあつた。しかし主張する主体は考える主体でなくてはならないのだ。あなたが「私」と言う話し手であろうと、「私」と言っている当のものを発見することはない。あなたは例えば、その「ワタシ」という「音声」がどんな器官から出るのか見ようと目をこらして、その器官が「私」と言う当のものだと想定したりはしないし、また器官に結びついた「私」と言うものに他ならぬ何かがあるのだという仮説を立てたりもしない。そうした「身体的な」ものが問題なのだとしたら、「私」と言っている何かが本当に存在するのかわかるか疑うことができる。じつさい、大きな声で「私」と言っている何かが存在するのかわかるか疑うこともできる、それと同様に。(そしてその疑いが正しいときもあるのだ。)

### 「私」の指示が保証されていること

かくして我々はくだんの論理学者に、「私」の〈指示が保証されていること〉を考えるよう迫る必要がある。このことを認める場合、それには論理学者が主張するかもしれぬ三つの段階がある。(一) 論理学者は言うかもしれない——もちろん「私」を使う者が存在せねばならず、さもないとその者は「私」を使っていないことになるだろう。その者こそ指示対象に他ならない以上、そのことが〈指示が保証されていること〉の帰するところなのだ。そうした指示の保証にかんして「私」と「イ」とのあいだに相違はないことになる——論理学者はそう付け加えるかもしれない。しかし問題は、なぜ「私」が「私」使いを指示していると言われたかなのである。くだんの論理学者は、「私」が論理的には固有名——すなわち指示をするのが役割の単称名辞——であるのは二つの理由からだと言張っていた。その一つは、そうした表現と同じ構文論上の「文中での」位置を「私」が占める点、もう一つは、Xのなした主張のなかで「私」が主語の位置に現れているとき、その「私」を「主張文全体の」真偽はそのままXの(もつと普通の)名前と置き換えられる点である。このように言うさい、「私」の意義や「私」使いが「私」でもって何を意味しているのかについてどんな「特定の」見解にも自分は与していないのだと論理学者が考えたことは間違いない。けれどもかれの二番目の理由「固有名と置き換え可能」は結局はこうなる——「私」が主語である言明を聞いたり読んだりする者は、その言明が真のとき述語が誰に当てはまるのか知りたければ、それが誰による言明なのか知る必要がある、ということである。さてこうした要求には、「私」という語がなくとも」例えば述語に連動した緑色の灯りを点けることで、あるいはひよつとして述語に「ラテン語ふうに?」「オー」という語尾を加えることでも、合図する「こ

とで応える」ことができる。(こんな提案はあまりに現実ばなれしていると思う読者がいればお詫びし、しばし不信の念を抑えていただくようお願いする。) こうした合図や接尾辞が何によって指示表現となるのだろうか? 「私」が指示表現だとする「肝心の論証が構文法から指示へと戻ってゆく論証であることはいえ、なぜってそうした論証はただ「意味内容を度外視して」文の形に依拠するだけの、ゆえに馬鹿げたものだろうか。(例、*it is raining* に *it* という指示表現が含まれているとは誰も思わない。) そうなると「私」の意義への関心、少なくとも「私」使いが意味せねばならぬものへの関心を、くだんの論理学者が否認することはできないと思えるのだ。

(二) だから「私」が指示表現なら、「私」使いは何かを指示するよう意図せねばならないのである。ところで「指示が保証されている」がここで意味するのは二つの異なることがあるのだ。それは(二ア)「指示表現を」使う者が意味する対象の存在することが保証されているという意味でありうる。言い換えれば、「与えられている」何かに結び付けて「指示」表現を使うさいその何かがそれに他ならぬと使う者が見なしている、その当の対象が存在しなくてはならないのである。例えば、「X」と呼ばれる者を自分が知っていると、その人物を指示する意図でもって私が何かを「X」と呼ぶなら、この意味での指示の保証とはXなるものが存在するという保証であろう。私の発明した「イ」という名前は、こちらのような仕方では指示が保証されているだろう。「イ」使いはある人間、かなり特別の仕方では観察下にある人間について話をしようとしている。その人物とはかれ自身であるのだから、「イ」の使い方を理解しているのであれば、かれは実在する人物の話をしていることになる以外ない。

「私」の指示が保証されていることの説明としてはこれで十分だと、くだんの論理学者が見なすのであれば、さらに別の種類の(指示が保

証されていること)があるが、そちらは「私」にはないのだと、かれは認めざるをえないことになる。例の名前「X」の指示がこのさなる意味で保証されていること(二イ)は、Xなるものが存在していることだけでなく、私がXと見なすものがじつさいにXであることも含意していよう。誰か別人を(イ)と同定してしまう誤りを「イ」使いが免れてない「だから名前「イ」は二イを充たさない」だろうということはすでに見た。事情は「私」にかんしても同様になるのだろうか?

そのような「同定の誤りという」示唆は馬鹿げて見える。「私」がそもそも(指示表現)であるなら、「二アと二イの」どっちの種類の仕方によせよ「私」の指示が保証されているのは明らかだと思えるのだ。「私」使いが「私」でもって意味する対象はかれがこの語を使っているかぎり存在せねばならない「二ア」し、またかれが間違った対象を自分が「私」で意味している対象だと思ふこともありえない「二イ」のである。(僧正がご婦人のヒザを自分のヒザと思ひ込むことはありうるが、ご婦人そのひとを自分自身と思ひ込むことがありうるだろうか?)

「私」の意義にかんする疑問は放棄して、正しい対象への指示がどうして保証されるのだろうか、その点だけ問うことにしよう。(これは適切なことだ。一種の純粹な直接指示、たんに目前の対象をまず意味してから指示するというだけの指示の仕方を、人々がここで念頭に置いているのは確かなのだから。)すると、この場合の指示が絶対確實でありうるのは、「私」の指示対象が「私」の使用されるそのつど新たに定義されるときに、何かが私だと見なされているあいだは視野に留まっている、そんな場合だけだろうと思われる。その場合でさえ、何か別のものがコッソリ入れ替わってしまうことはないという前提の上での話だ。そんな前提も「私」の場合には心配無用のきわみ



であり、この前提を疑うのは懷疑論の完全な行きすぎというものだろう！——ひょっとしてそう言うべきなのかもしれない。そこで上の前提を受け入れると、「私」が指すものはデカルト的自我でなくてはならぬという帰結が生ずるように見えるのだ。

というのも、それが何か別の対象だと仮定しよう。もつともらしい候補はこの身体となる。ここで、私が「心理学実験の」「感覚剥夺」の状態に陥ると想像せよ。視覚は遮断され、身体全体に局所麻酔を施されて、もしかするとヌルマ湯を満たした水槽に浮かべられているのかもしれない。話すこともできず、おのれの身体の部分に別の部分で触れることもできない。ここで私は独りごつ——「こんなこと私は二度とごめん」。「私」によって意味される対象がこの身体、この人間であるとする、かような状況でそれは私の感覚に現れていないことになるだろう——それ以外にどうやって私（に現れている）ことができるのか？ 他方で、自分が「私」で意味しているものを私は失くしてしまったのか？ それは私に現れていないか？ いわば私は（指示対象つまり自分が）不在のまま指示する）はめになっているのか？ 私は自分の（自己意識）を失くしてはいないし、また「私」で意味するものもはや私に現れていない対象となることもありえない。この二点はそれじたいで正しいことと思われ、また目下考察している（指示が保証されていること）が要求するところでもあるだろう。

似たような考察が「何が指示対象かについての」他の提案にたいしても有効だろう。デカルト的自我以外に役割を果たせるものはないだろう。あるいはむしろ「時間軸に沿った」その拡がりと言うべきか。デカルトはどうして思惟する実体という結論に至りうるのか、ときに人々はそんな疑問を口にしてきた。<sup>6</sup>しかしそう問うのは、思惟実体の本質が考えること以外の何ごとでもないデカルトが断じているのを忘れるに等しい。この思想を考えている当の思考——それ「だけ」が

「私は考える」により保証されているものである。

そんなわけで、かりに「私」が指示表現だとすれば、デカルトは何が指示対象であるのかという点で正しかったのだということを我々は見出す。しかしながらデカルトの立場は、異なる複数の「私」思想において同一の指示対象を同定する必要があるという、容認できない難点を孕むのである。（かくてラッセルはある箇所、複数ある〈短時間の自己〉について語ることとなった。）

### 「私」は指示表現ではない

我々の立てた問いを合わせると、「私」とは（単称指示をなす）の役割とする語なのだという考えにたいする背理法となっていた。私という問いとは、対象を正しく手に入れることがどうして保証されるのかとか、気づかぬうちに「指示対象が」入れ替わることはない想定して大丈夫なのかとか、（不在のまま）自分自身を指示できるのだろうかとか、その他もろもろである。対象を正しく手に入れるのだという示唆は、その示唆を突き詰めていって、誤った対象をつかんでしまうのをどうやって排除したらよいか記述しようとするなら、馬鹿話に成り果ててしまうのだ。

それどころか、私がいま考えているこの思想のこの思考に他ならぬ思考がただ一つだけ存在し、またそれを思考するものもただ一つだけ存在するのだという前提さえ（それが前提だとして）、どうやって正当化できるだろうか？（私）とは一斉に思考する一〇の思考するものでないのだと、どうして分かるのか？ いやひょっとして「背理法は」必ずしも成功してないかもしれない。いま述べたことは、私がときに思想の混乱を感じるのはどうしてなのか説明してくれるかもしれないのだ。——「レギオン」「軍団の意」、我ら多きがゆえなり」という、

福音書に出てくる悪霊に憑かれた男の返答を考察せよ。<sup>[15]</sup>もしかするとこのセリフは文法に坎する冗談<sup>[7]</sup>としてでなく大まじめに受け取るべきものなのかもしれない。——こうした考察は「私」を〈定記述〉だと説明するやり方への反駁となる。というのも、その手の説明への検討に値する唯一の候補は「これを言う『唯一の』もの」だが、そこでは「言うもの」は「考えるもの」という意味を含むからだ。

間違った対象をつかむことがじじつ排除されているものだから、我々は、正しい対象をつかむことが保証されているのだと考えてしまう。しかし「排除されている」その理由は、対象をつかむことなどそもそも存在しないということなのだ。名前あるいは（ラッセルの意味での）表示表現<sup>[16]</sup>には、理解すべきことが二つある。すなわち使用の種類と、そうした語句を折々に何にたいして適用すべきかということ。だが「私」には、その使用があるだけなのである。

### デカルト的自我の孕む困難、そして解決

これがあまりに信じがたいなら、つまり「私」が本<sup>い</sup>当<sup>い</sup>に、〈指示表現〉なら、デカルトが正しかったのだ。だが今度は紛糾が始まる。当初、「私」が指すものはこの上なく明晰でこの上なく確実なもの——何の思考であれ自分自身の思考について、また何の意識であれ自分自身の意識について思考する何者も、この上なく明白に意識しているもの——であるはずだ、あたかもそう思われる。この上なく確実であるわけは、アウグスティヌスが述べたように、何であれ心の行為や状態「思考や感情、感覚など」がそれを有する当人に知られる、その知識にそのものが含まれているからだ。そうした心の行為や状態を疑うことはできない。しかしながら、私<sup>い</sup>ないし〈心〉ないし〈自己〉とはその種のもの自体であって対象ではなかったし、対象としての自己を

捜し求めるのは完全な失敗に終わると考える人々もいたのである。それは見つけられなかった。自己とはむしろ、いわば光がそこから放たれ他のすべてを照らしている闇の領域なのだった。ある人々はそこで、この不可視の主体が、および〈「それ」について思考する〉ことが何でありうるのだろうか、そのことに頭を悩ませたし、また他の人々は、そんなものは存在せず、ただ「心の行為や状態の」対象すべてが存在するだけで、それゆえ「私」はむしろ知覚の集まり全体に与えられた名前なのだと考えた。けれどもそれは「私」という語の文法にほとんど合致しなかったし、いずれにせよ——ヒュームが完全に途方にくれた問題だ——何によって私<sup>い</sup>は一なる全体となるのだったか？ 別の人々は結果として、自己とはさまざまな人々の口から出る「私」がその名前となるよう要請された対象「にすぎないの」だと論じている。しかもまた別の人々は、自己が不可視であることを否定し、記述不可能だがとつても、とつても重要な（とりわけ心理学や臨床心理学や精神医学で）、自分自身についての特有の感じが存在するのだと主張した。

「私とは主体であって対象ではなく、それゆえ不可視である」——この思想において我々は、言語じたいがいわば想像力を具有しており、おのれのイメージを我々に押し付けてくる、その実例を手に行っているのである。

この論争は居座りつづけて、果てしがなく、解決不可能だ。出発点となる前提、論争する各派がこれまで例外なく採ってきた前提、つまり「私」が指示表現だという前提に固執するかぎりには。これが前提であるかぎり、ひとは深い分裂に直面することだろう。すなわち、困難を知覚しなかったことが考察に表れている人々「論理学者」——この人々にとり「私」は原理上は私の「イ」といささかも相違はない——と、二つの相違をじつさい知覚している（ないし知覚するだろう）がゆえに、大騒ぎするに至る人々「哲学者」との分裂だ。

そしてこれが解決である——「私」は名前でもないし、その論理的役割が指示をなすことであるような別種の表現「直示語など」でもないのだ、全然。

### 「私」の規則はどうなる

もちろん「Xが『私』を主語にして何ごとか主張する場合、かれの主張が真であるのは、かれの主張することがXについて真であるとき、かつそのときにかぎるだろう」という「真理条件を規定する<sup>124</sup>頁の」規則は受け入れなくてはならない。だが、それが「私」の十全な説明だと考える者がいれば、「否、十全ではない」と言わねばならぬ。というのもこの規則によれば「私」と「イ」にはどんな違いもないから。「主張」文全体の真理条件によつては、その文が含まむ語句の意味まで決定されはしない。だから上の規則によつては、Xの口から発した「私」がXの別の名前だという考えは正当化されないのである。また何にせよ他のものの名前、例えばXをつうじて話をしている主張する主体の別の名前だという考えも同様。

とはいえ上の規則は確かに、「誰の主張か」という問いが肝心なのだということを意味してはいる。そして例えば通訳者は依頼主の「私」を自分の訳のなかで繰り返すかもしれない。この点で以下のような状況が想定可能となる。ある者が私の前に立つてこう言う——「いまから言うことを信ずるようにしなさい。私が『私』と言うとき、それが意味するのは音声を発しているこの人間ではない。私は別の誰かであつて、こいつをつうじて話をするためにこの人間を借りているのだ。」私が「想定可能」と言うときそれは、こんなお告げがひよつとして真実かということではなく、我々の想像力はこうした考えをも利用するのだということに尽きる。（霊媒、憑依現象。）

### 同一性命題ではない

私の一般的テーゼ「私」は指示表現でない」が正しいとすれば、重大な帰結が生ずる——すなわち、「私はエリザベス・アンスコムである」は結局のところ「<sup>エリザベス</sup>という」同一性命題ではないのである。「確かに」それはある同一性命題に結びついている、つまり「ここに<sup>ある</sup>このものはエリザベス・アンスコムである」に。だが「私はここに<sup>ある</sup>このものである」という「同一性命題でない」命題もまた登場しているのだ。

人間が自分の同一性命題<sup>アテンテティ</sup>を知らぬ場合、いわゆる〈記憶を失つて〉いる場合、かれが知らないことは何かと言えば、それは通常、かれが自分自身（これは直接再帰）を指さすさいに指さすだろう当の人物が例えばスミス、しかじかの背景を有する人間「と同一」だということである。かれは「第一に」「私」という語の使用を失ったのでもないけれども、「第二に」自分の身体として何を、ないし自分が他ならぬ人物として誰を指さすべきか、ふだんから途方にくれているのでもない。また「第三に」予想もしない物体を、例えば石だの馬だの別人だのを指さすだろうというのでもない。この三点のしまいの二点は三つのうちの第一点に含まれるかと思えるかもしれない。しかし上で見たように「通訳や憑依の例」、少なくとも想像上は分けることが可能である。私がここで「人物<sup>パーソナ</sup>」という語を使う場合、「まさしく」「人格攻撃<sup>パーソナル</sup>」「個人攻撃<sup>パーソナル</sup>」「という表現」にその語が現れるときの意味で使っていることに注意されたい。この点になると、自分がどれほど深く二元論に染まっているか人々は図らずも示すことだろう、つまりこう言うだろう、「あなたは『人物』を『身体』という意味で使っている」と——そして人々が「身体」で意味しているのは、誰かが死んでいてもそこに残っている何かだ。しかしそれは「人格攻撃」の誤解である。死骸にそん

なことを行うのはいっさい不可能だ「が、人格攻撃の対象たる人物とはデカルト的自我でもない」。《人物》とは生きた人間の身体なのである。

### 命題「私はここにありこのものだ」の意味

ここに本ものの「ノンセンスでない」問いがある——行為や姿勢や「身体」の動きについての私の意識、また私のさまざまな意図、これらはどんな対象と結合しているのか、それも、私は立っているという思想が私にあってその思想が真であるならその対象が立っていないなくてはならぬ、という仕方か？ そして問いにたいする答えもある——それはここにありこの対象だ。

そうすると、「私はここにありこのものだ」は本ものの命題ではあっても同一性を表す命題ではないのである。それが意味するのはこうだ——「ここにありこのものは当のもの、すなわち、行為についてのこの<sup>アイディア</sup>「思想」がそいつの行為についての考えであり、動きについてのこれら考えがそいつの動きについての考えであり、姿勢についてのこの考えがそいつの姿勢についての考えである、その当の人物（《人格攻撃》の意味で）である。なおまた、これら意図されている行為が、遂行されればそいつの行為となるだろう「当の人物である」。

ときおり私は、「私は座っている」、「私は書いている」、「私はじっとしているつもりだ」、「私はビクリとした」といった「私」思想を抱く。「そこで」次のような問いがある——さまざまな「身体的」できごとや事態、等々にさいして、こうした思想はどんな対象にかんして検証あるいは反証されるのか？ その答えを与えるのは通常なら簡単だ。なぜって私は自分の身体を観察し、指し示すことができるから、また身体の一部を別の部分で感ずることもできるから。すると「この身

体は私の身体である」が意味するのは、「私が立っているという私の考えはこの身体により検証される、もしそれが立っているなら」以下同様、ということである。とはいえ、どの身体が当の身体かを観察が私に示すわけではない。何かがそれを私に示してくれるわけではないのだ。

### 私思想とは身体にかんする媒介ぬきの把握

「他方で」私が例の《感覚剥奪》状態に置かれていたなら、「この対象」「この身体」という思想を抱くことは不可能だろう——「この」が捕捉している「123頁」ものは何もないだろう。とはいえ、行為や「身体」運動、等々についての考えを抱いたままであることが不可能だろうと言っているのではない。というのも、こうした考えは感覚による観察から抽出されたものではないからだ。感覚剥奪の下でもそういう考えを本当に私が抱いているなら、そのような身体が存在するとひょっとして信ずることだろう。しかし、そんな身体がいっさい存在しないという可能性もあるいは思いつくかもしれない。すなわち、私がそれである当のものはそうすると何もないのだ、という可能性を。

かりに「私」が名前であるなら、この身体とこの種の結合をしている何かの名前でなくてはならないだろう。この身体の風変わりな名前というわけにはゆくまい。この身体の名前でないのは、感覚剥奪によつては、あるいは姿勢、等々の意識を失うことによつてすら、私を失うことはないからだ。（少なくともこの点は、「私」を名前と見なす場合でも従わねばならぬ語り方だろう。）

しかし「私」は名前ではないのだ。こうした私思想は、私が「私」で意味している対象の、ではなくこの身体の状態や行為、運動、等々にかんする反省的意識の具体例である。こうした私思想は（立ち止まっ



て少し考えるのを許してほしい！）……ここにあるこの対象、それがエリザベス・アンスコムに他ならぬと私が（知らなければ）見出すことのできる対象、その対象の状態や運動、等々の「観察といった」媒介なき把握（ないし知識ないし信念、真または偽の）なのである。<sup>[7]</sup> すなわち、それは一人の人間だとかつて私が学んだ対象の「状態、等々の媒介なき把握なのである」。

### 自己の同一性は問題にならない

エリザベス・アンスコムとこのように結合している現在の私思想は、二十年前そのように結合していた私思想と同じ人間のがわの私思想である。〈私〉の連続性あるいは再同定という問題は何ら生じえない。そんなもの「私」は存在しないのだ。「むろん」エリザベス・アンスコムは存在し、それは他の人間たちと同じく、こうしたような「私」思想を抱く。またそれはおそらく、自分が何をしたか、いま何をしてるか、等々を言うのを「幼いころに」学ぶことで、そうした思想を抱くことを学んだのである——それは模倣のなせる驚くべき業だ。<sup>わざ</sup>「それですべてである。」

### 自己感、自己知、魂

記憶を保っているのに、〈自己感〉<sup>セルフ・フィーリング</sup>「128頁」が連続してないこと、以前あった自己感や自己イメージから解離してしまうこと——こうしたことはもちろん生じうる。だからひょっとして自己感を完全に失うことも「生じうる」。この〈自己感〉が何なのかは疑いなく「哲学よりも」心理学の関心事である。もっと標準の状態は、かかる不連続や解離や喪失が存在していない状態だ。そうしたものが不在であることを

それゆえ、〈自己感〉を保有していると呼んでよい——記しておけば、これは標準の事例よりむしろ異常な事例を考察することで「のみ」同定できるものではないか、そう私は思っている。

自己知とは、ひとがそれである対象、ひとがそれである一頭の動物たる人間にかんする知識である。〈内観〉はそれを得るのに役立つ方法の一つではない。それはかなり疑わしい方法であって、というのも内観は自分自身にかんする事実<sup>事実</sup>に気づくよりむしろ自己イメージを練り上げる点に存する可能性があるからだ。

エリザベス・アンスコムにおける人間としての理性ある生命の根源がかりに魂（もしかしてそれはエリザベス・アンスコムの死後も存続し、もしかしてエリザベス・アンスコムに再び息を吹き込めるのかもしれない）なのだとしても、それが「私」の指示「対象」なのではない。またそれこそ私がそれに他ならぬものなのでもない。私はエリザベス・アンスコムであって、エリザベス・アンスコムが存在するかぎりでのみ存在するであろう。しかし繰り返せば、「私はエリザベス・アンスコムだ」は同一性命題ではないのである。

### デカルトとの対比

ここまで考察してきた私思想が行為や姿勢、動き、意図に関係するものだけであるのが、やがて目についたことだろう。それは例えば「私は頭痛がする」とか「私は思考することを考えている」とか「私にはとりどりの色が見えている」とか「私は望み、怖れ、愛し、羨み、欲する」とか、等々の思想ではなかった。私の行き方はデカルトと正反対なのだ。後のほうの命題はデカルトだったら考察したであろう、まさにその命題だが、前のほう「行為、姿勢、等々にかんするもの」はデカルトにとり難題だった。しかしデカルトにいちばん難物

であったものが私にはいちばん簡単である。

前に言ったことを繰り返させてほしい。「私は立っている」や「私は跳び上がった」のような思想を私は抱く。さて次の問いは意義あるものだと私は言った「130頁」。すなわち「さまざまのできごとや事態、等々にさいして、こうした思想はどんな対象にかんして検証ないし反証されるのか？」——そして答えは「この対象である」だった。行為や姿勢、動き、意図された行為についての「私」思想だけを取り上げる理由は、こうした思想だけが、媒介ぬきの観察によらないものであると同時に、エリザベス・アンスコムという人物にかんして直接に検証ないし反証できる記述（例、「立っている」）でもある、という点である。私自身を含め誰であれ、当の人物が立っているかどうか目を向けて見ることができるのだ。

## デカルト的私思想の問題

「さまざまのできごとや事態、等々にさいして、こうした思想はどんな対象にかんして検証ないし反証されるのか？」という問いは確かにもう一方の、デカルト好みの「私」思想についても提起できよう。その真なる答えは「もし何らかのできごとや事態、等々にさいして「検証ないし反証できるの」であるなら、それはこの対象——すなわちエリザベス・アンスコムという人物——にかんするできごと、等々においてだ」というものだろう、そう私は主張すべきである。しかし、できごと等々の記述は思想「そのもの」の記述とぴったり同じではあるまい。私が言うのは、「私は立っている」という思想はここにいるこの人物が立っているという事実により検証され、その人物が立っていないければ反証される。記述がこう同一であることは、しかし例えば「私にはとりどりの色が見える」という思想では完全に失われてしま

う、ということである。もちろん読者はお好みなら、この思想はここにいるこの人物にとりどりの色が見えるとき検証されると言ってもよいが、しかし問題は、その思想がこんな仕方では検証されるとはどういうことかという点なのだ。デカルト好みの思想はすべて、この同じ性質を共有している。すなわち、こうした思想がそこで検証されるかもしれない、人物の「身体的」<sup>フロッピーディスク</sup>行 動、等々の記述とは、記述の面ではかけ離れているという性質を。しかもまた、そうした行動、等々は何も存在しないかもしれない。また存在する場合でさえ、問題の思想はそうした行動についての思想ではなく、その点で、立っているという思想が姿勢についての思想であるのとは異なっている。こうした問題について探究するのは本稿ではできない。ただ、「私はエリザベス・アンスコムである」の意味を説明するさいに本稿で追いかけている特定の種類の「私」思想をどうして追いかけるのか、そのわけを示したい。「私」を哲学的に理解したいならデカルト好みの思想は探究すべきものではないと、なぜ私が考えるか、これはその理由を示すのに十分ではないか。

## 一人称表現がないとせよ

はっきりした一人称表現も、代名詞「私」も存在せず、さらに動詞の一人称変化形すらも存在しなかったと——そのようなことは可能だ——想定せよ。各人は自分自身の名前を、我々が「私」を使っているように使うのだ。（子どもはときにこうする。）そんなわけで、この想定上の言語ではその人間自身の名前が「私」の代わりに登場するのである。それでどうなる？ かれ自身の名前は依然として名前ではないだろうか？ 確かにそうだろう！ 構文論上さらに意味論上も名前であるものを、かれは使っていることだろう。すなわち、他人の口か

ら発せられる場合、それは意味論上は名前だろう。しかしながら、かれ「自身」の口から発せられる場合はそうではなからう。かれの発話内ではそれは名前みたいな仕方の意味することはないだろう。

私が「エリザベス・アンスコム」をこのような仕方を使っていて、動詞の一人称変化もなければ「私」のような語もなかったとすると、現状の「私はエリザベス・アンスコムだ」という命題に相当する命題を形成するのが難しくなるだろう。手に入るのはいちばん近いのは例えば「エリザベス・アンスコムはエリザベス・アンスコムという対象だ」であろう。すなわち「エリザベス・アンスコムは、何かをエリザベス・アンスコムと同定する人々が指示する対象だ」であろう。

### 自己意識は私的経験でない

ここでいともたやすく犯してしまう誤りが存在する。自己意識にかんする違い、「私」使いと「イ」使いとの違いとして読者の注意を促そうとしてきた違いが私的に「内的意識で」経験されるものであると想定する誤りである。すなわち、「私」について次のような対称的でない点が存在するという想定だ——聞く者や読む者にとって「私」は原理上「イ」と何ら異なる点はないが、「その一方で」話す者や考える者、つまり「私」と言っている当の主体にとっては異なっている、ということである。さて、これは本当でない。「私」使いと「イ」使いとの違いは観察していれば知覚できるだろう。この点を明らかにするため、ウィリアム・ジェイムズにある以下の話を考察せよ。意識は自己意識とは全く別のものとジェイムズは主張していた（それは私が正しければ正しい）が、友人からの示唆に富む手紙を引き写している——

私たちは……軽四輪馬車<sup>ワゴネット</sup>で移動していた。扉がバツと開いてX氏、通称「ボールデイ」が道路に落ちてしまった。私たちがすぐ引き上げると、「誰か落ちたのか？」あるいは「誰が落ちたんだ？」とかれは言った——ことばは正確には覚えていない。ボールデイが落ちたんだと告げられると、かれは言った、「ボールデイが落ちたのか？　かわいいそうなボールデイ！」<sup>(9)</sup>

イ使いであつて、しかも自分自身を話題にするのにそれ以外のやり方がない、そんな人々に出会つても、我々はかなり早い段階でそのことに気づくだろう。ボールデイのおかしな点に仲間が気づいたのと、ちょうど同じように。ボールデイがかれ自身の名前を使っている点ではなかった。それはまだ後の話だ。「ボールデイが落ちたんだ」という形で情報を与えるよう誰かを誘<sup>いざな</sup>つたのは、思うに、(ジェイムズの言い方で)自己意識が失効していることをかれの振る舞いがすでに示していた点である。ボールデイは馬車から落ちたばかりで、意識はあり、誰かが馬車から落ちたという考えを有していた——ないし誰かが落ちたという知識はあつた——が、誰が落ちたんだろうと思つたのだ！かれの状態がどんなものかは、そのことが示していた。

「私」なき言語をかれが話していたとしても、その言語に一人称変化形もなく、自己意識を表現するときには各人が自分自身の名前を使つていたとしても、その場合でさえも、ボールデイの振る舞いは全く同じ意義を有していたことだろう。それは自分の言うことに「ボールデイ」を使い「私」を使わない点ではなかった。馬車から落ちるといふできごとについてかれが抱いた思想が、その主体を「誰が？」と「かれが捜し求める思想であり、できごとについてかれが有していた把握が、主体を必要とする把握であるという、その点であつた。たとい「私」や明確な一人称変化形が存在しなかったとしても、この点

は明らかにできよう。「つまり」〈行為やできごとや状態を、行為しあるいは身に受ける者が媒介ぬきに把握すること〉と私が呼ぶであろう何か、ボールデイにはなかったのである。こちらの把握は主体不要である。すなわち、「落ちた」などの「述語で理解されていることと明確に把握された主体とのあいだの結合を、含んではないのだ。文法に由来する（深く根をはった）幻影、すなわち主体という幻影が、ここまで考察してきた誤りのすべてを生み出しているものなのである。

追記 同僚のJ・オルサム博士が、「私」にかんする124頁の規則の難点を指摘してくれた。「ジョンが私を愛していると私は思う」からこの規則のために述語をどうやって抽出すべきか？ くだんの規則には補足が必要である——「私は」あるいは「私を」が間接文脈「間接話法の副文」の内部に現れた場合、述語は「私は」や「私を」を間接再帰代名詞で置き換えることで特定さるべし。

# 原註

- (1) 『神の国』一一卷二六節。
- (2) 『三位一体論』一〇卷。<sup>1</sup>
- (3) 『哲学原理』一卷六〇にはデカルトによる言明の最良のものが含まれていて、思うにこの言明には、置き換えの誤謬<sup>2</sup>を犯しているという通常の非難は当たらない。

我らおのおのは自分自身が意識「思惟」する存在であると把握しており、さらには意識するものであれ延長あるもの「物体」であれ、他のどんな実体をも思考のうちで自分自身より排除することができる。そこでこの事実のみからして確実であるが、我らおのおのは、そのように見なされるなら、どんな他の意識する実体と

もまたどんな物的実体とも実体として区別されるのだ。そうして、神が何らかの物的実体をそのような意識する実体に、それより密接に接合できないほど密接に結合し、かくてその二つから統一体を合成したのだと我々が想定しようとも、それでもなお二つは実体として区別されたままなのである。

ここでのデカルトの前提「第一文後半」を「私は自分自身が私の身体を含まない、ないし私の身体ではないと把握しうる」に変えれば、我々はクリプキ版（とはいえ一人称だが）に接近する——すなわち「私がAでないことは可能である」、ここで「A」は私の身体を意味する。しかし、私の身体が存在するのを疑いうるといふ理由からでなければ、どうして私は自分自身をそのような「身体を含まない、ないし身体でない」ものと把握できるのか？

しかしここでの「疑うこと」が意味するのは、私の身体が存在するかどうか私は知らないけれど私自身が存在することはさにあらずと反省することではない。そう理解する場合、デカルトの論証には置き換えの誤謬が確かに含まれることになる。『疑うこと』が意味するのはこうだ——余すところなく理解されること、私が確信する唯一のこと、すなわち私自身が存在することによつては、私の身体が存在することは保証されないのだと明晰に理解すること。聖アウグスティヌスが補っている前提「心はそれ自身が存在するのを知る」が重要だということが分かる。

- (4) *Leçons de philosophie*。トゥキユディデス『歴史』二卷一三を見よ。この形は稀である。英語において間接再帰（それにたいする明確な形は英語にはない）を識別する功績は現代ではカスタニエダに帰せられる（H.-N. Castañeda, "The Logic of Self-Knowledge", *Notus*, I, 1967, 9-22）。しかしかがが提示する仕方は極端に込み入っており、思うに実質的な



論点に十分な注意を惹きつけていない。

- (5) それにたいして基盤が準備されていない純粹な直示定義があるのだと人々が信じていた時代には、この点は認識されていなかった<sup>[12]</sup>。かくしてそんな時代にはまた、「都市」が「ロンドン」に対応するように「私」に対応する「意義を表すとする」十分な説明のできる語が見つからない事実にも、受けてしかるべき印象を受けずに済んでいることが可能だった。固有名としての「私」にはどんな〈意義〉（フレーゲの意味での）もないことを見ながらもなお、一人一人にとって「私」が一つの〈直知の対象〉の、すなわち一つのこれの固有名であると考え、そんなことが可能だったのである。するとこれは何なのかという問いの答えを「自己」と呼ぶことができたのだし、「自己」という語をそれ以上正当化する必要は何もないと感じられたことだろう。かくて例えばマクタガートの哲学が生ずる。次を見よ。McTaggart, *The Nature of Existence*, Vol. II, ¶382, 386-7, 390-1, 394.
- (6) 例えばエア、次を見よ。A. J. Ayer, *Language, Truth and Logic*, p.142.<sup>[13]</sup>
- (7) アンブロウズ・ビアスは『悪魔の辞典』で、「私」という見出し語の下に嬉しい解説をしている。

私はアルファベットの最初の文字、言語の最初の単語、心が抱く最初の思想、愛情の最初の対象である。文法ではこれは一人称単数の代名詞である。その複数形が「私たち」<sup>ウチ</sup>だと言われているのだが、一つより多くの私自身がどうして存在しうるのか、それはこの比類なき辞典の著者よりも文法学者のほうがよくご存じなのは間違いない。二つの私自身を理解するのは困難なことだが、結構なことである。「私」を率直にしかし優美に用いる点で、優れた作家は悪しき作家とは区別され、後者はマントで盗品を隠そうとする盗人の流儀で「私」を携えている。

- (8) フェレスダール教授と「編者の」ガトンプラン氏によれば、私の言っていることとスピノザの言うことがいささか似ているそうだ。ご指摘に感謝します。けれども私がスピノザを理解しているとは言えない。
- (9) W. James, *Principles of Psychology*, Vol. II, p.273n.
- (10) ラテン語では「私は歩く」を「動詞の一人称変化形で」“ambulo”と言う。「私」に相当する「主語はない。その必要がないのである。

## 訳註

- [1] 英語より重訳。それぞれ “the mind knows itself to think”、“it knows its own substance”、“it is certain of being that alone, which alone it is certain of being”。
- [2] クリプキ『名指しと必然性』（八木沢敬・野家啓一訳、産業図書）。
- [3] 置き換えの誤謬とは例えば、「私の身体が存在しないと想定できる」と「私Ⅱ私の身体」とから置き換え（代入）により「私が存在しないと想定できる」へと移行するような推論であろう。ここから矛盾が生ずるので、論証の結論として「私Ⅱ私の身体」が否定される。しかし「想定できる」は指示について不透明な文脈（訳註4参照）を形成するから、上記の推論はそもそも誤り、ということか。
- [4] 指示対象の同じ語句でも真偽そのままで置き換え（代入）できない、つまり代入則の成立しない文脈を、指示について不透明な文脈と呼ぶ。例えば「北野武は映画監督だとかれは知っている」が真でも「ビートたけしは映画監督だとかれは知っている」は偽かもしれない（同一人物であるのを知らないかも）。意図を述べる「スミスはそれと知りつつ意図してスミスの話をした」および「スミスはそれと知りつつ意図して自分自身の話をした」も指示にかんして不透明であって同値ではない、だから「それと知りつつ意図して自分自身の話をするさい使う語」という「私」の説明は依然として有効だ、という反論か。

[5] フレーゲ「意義と意味について」(土屋俊訳)、『フレーゲ著作集4 哲学論集』(黒田亘・野本和幸編、勁草書房)所収。フレーゲによれば、名前の意味ないし指示(指示対象)とはその名指す対象、名前の意義とは意味が「与えられる仕方」、対象を特定し把握するその仕方である。一つの意味、例えば金星に複数の名前(金星)「明けの明星」「宵の明星」があり、名前ごとに異なる意義が結びついている場合、意味を特定しても意義を特定できない。

[6] 構文論(統辞論)とは、言語学や論理学において、語や記号どうしが結合して文を構成する規則すなわち構文法にかかわる分野。これにたいして、語や記号とそれが意味するものとの関係を考察する分野が意味論。

[7] 同姓同名が多く窓口が混乱するのか。ウェイルズは連合王国の一国。ケルト語派のウェイルズ語が用いられる。

[8] シク教はヒンドウ教の一派、インド北西部を中心とする。“Singh”は獅子の意で、男子のシク教徒に付ける添え名。

[9] 内示するとは語が概念の内包を表現すること。語が外延を指す＝外示することに対する。例えば「人間」という語は〈羽のない二足動物〉という内包を内示し、すべての人間の集合を外示する。

[10] 定記述とは欧語に見られる定冠詞+単数という形の表現。“the man who killed Caesar”, “the least natural number”など。記述の当てはまる唯一の対象を指示する役割を有すると見なされている。

[11] この「そいつ」は「誰か」を受ける束縛変項「x」の役割を果たしており、固有名で置き換えられない。

[12] 「ロンドン」という語を、例えば上空から指さして「これがロンドンだ」と発話することで定義できよう。これを直示定義と呼ぶ。子どもが言語を習得する出発点はこうした直示定義だという考えがある。このとき直示定義は言語を全く知らない子どもでも(それゆえ都市概

念などの基盤をいっさい必要とせずに)理解できると見なされている。ウィトゲンシュタインは『哲学探究』でこの考えを批判している。

[13] 「これ」を指示対象が欠けることのありえない論理的固有名だとラッセルが見なしたことはよく知られる。

[14] エイヤー『言語・真理・論理』(吉田夏彦訳、岩波書店)。

[15] マルコ伝、五・九。

[16] “all men”, “some men”, “a man”, “the man who killed Caesar”(定記述)といった表現は、固有名を含まないのに現実の事物を表すかに見える。こうした句をラッセルは表示句と呼んだ。筆者はとくに定記述を念頭に置いている。

[17] 「観察に基づかない知識」については、アンスコム『インテンション』(菅豊彦訳、産業図書)を参照。

## 訳者付記

本稿は、

Anscombe, G. E. M., “The First Person”, in Guttenplan, S. (ed.), *Mind and Language*, Oxford, 1975.

の全訳。

アンスコム (Gerrude Elizabeth Margaret Anscombe, 1919-2000) は英国の哲学者。ウィトゲンシュタインの学生にして遺稿管理人、同『哲学探究』の英訳者であり、また主著『インテンション』などをつうじて行為の哲学や倫理学に大きな影響を与えた。本稿は現代において「私」や自己を論ずるさい頻繁に言及される古典的論文。

なお「」内は訳者による補足(だから省いて差し支えない)、副

題および各節の小見出しも訳者による。またデカルトとアウグスティヌスからの引用文は英語より重訳した。

本訳稿はもっぱら学生を念頭に置いた「教材用」であり、厳密さより読みやすさを主眼とした。そのため慣例の訳語に必ずしも従わず、また一語一訳方式を採ってもいいない。大学院生は当然、原文に当たってもらいたい。